

小林秀雄の匿名連載

—ランボオ・バルザックの評伝—

佐藤雅男*

I 一連の遺稿

小林秀雄には、全集未収録の数々の文章が残されている。その中には新聞や雑誌コラムの短文や、発言の少なかつた鼎談もある。しかし、それらと異質な性格を持つ一連の遺稿が存在する。それは1927年から1929年まで、『文藝春秋』に匿名で連載された「ランボオ伝」「バルザック伝」「ボオドレエル伝」など、初期に取り組まれた評伝のことである。こうした評伝を合わせると400字詰め原稿用紙で270枚程度の分量になる。初期小林の作品には難解な漢語が多い。だが、これらは比較的平易な日常語で書かれ、テーマも明確で内容も豊富である。こうした文章が、今日の一般読者に隠されているのは異様な事実である。

小林の多くの代表作は、毎月の雑誌連載を基に制作された。その名前が明記された最初のは、1927年4月から翌年6月までに『英語研究』に掲載された「フランス語講座」である。原稿用紙に換算すれば120枚余りの分量になるが、これも全集未収録である¹⁾。その間、同時並行的に「ランボオ伝」が『文藝春秋』に1927年7月から翌年5月に亘り、匿名の埋め草原稿として掲載された。途中11月に「ボオドレエルの最後」という文章があり、4月に休みの回がある。それ以降は再び「ランボオ伝」が毎月連

*専修大学法学部兼任講師

載され、全9回で終了する。これらの一回毎の分量は、全て400字詰め原稿用紙で10枚程度である。「ランボオ伝」が終了した翌6月、同誌に匿名の「バルザック伝」(続く)「バルザック逸話集」という合わせて20枚程度の文章がある。その特徴的な文体から推察するに作者は小林でなければ、その影響を深く受けた人物である。今日までの年譜や研究史には無記載であるが、作者は小林秀雄と見なすのが順当であろう。彼はこの時期に、長谷川康子との同棲生活を解消し、一人で関西を放浪している。だがそうした実生活的な混乱状況も、メ切原稿を編集局に送りながらの放浪であったと考えても不思議ではない。そして「バルザック伝」は、(続く)の記述通りには続行されず、夏の間は連載は中断され、9月から「ポオドレエル伝」が始まる²⁾。

小林の創造的批評の萌芽的なありようを無視して、昭和初期の思想状況の一つの潮流を真に理解することは出来ない。本稿では、こうした初期小林秀雄の一連の雑誌連載の「ランボオ伝」と「バルザック伝」「バルザック逸話集」を紹介する。これらの評伝では小林自身が対象の生涯を年代記的に辿るような形式を採っている。それ故に評伝の其々に目次を付けて、本文の内容を図式的に要約しながら再構成してみよう。また小林の主要な文章に関してはそのまま引用し、その思想表現の特質を検討してみたい。

II 「ランボオ伝」の構成的意味

「ランボオ伝」の冒頭は次の様に、多少ともくだけた調子で始まる。

アルチュール・ランボオの名がフランス文学の空を彗星の様に、掠めたのは1870年から、1873年まで僅か三年の期間に過ぎない。この恐ろしく早熟な少年は16才で天才的表現を獲得して18才で言いたい事は皆んな喋り尽し

てアフリカの沙漠に消えて了った。こんなベラ棒な存在は古今東西何処を探したってありゃしない。最も早熟な天才、例へば、ユーゴーにした処がバイロンにした処が、ランボオが、もう言いたい事は皆んな言っちゃった、文学よさらば！と敬礼した年頃になって、やっと自分の言いたい事に気が付いた。否、気が付き始めたわけになるのだ。こんな男の生涯が自ら無類の奇譚となるのは当然な事である。僕はアルチュル・ランボオ伝なんて書いちゃったが、勿論これは床屋の親父が読む宮本武蔵伝に過ぎないのだ。何故って考へて見給へ。電車の中で文藝春秋を読む紳士淑女諸君にとってランボオの苦悩なんて絶対に関係ない怪物じゃないか。さて僕は与太を飛ばし始めなければならぬのだが、愛するランボオの魂よ許しておくれ！

『仏蘭西文学研究』に掲載された「人生斫断家アルチュル・ランボオ」の冒頭は、「この彗星が、不可思議な人間厭嫌の光芒を放ってフランス文学の天空を掠めたのは、1870年より73年まで、15才にして、既に天才の表現を獲得してより18才にして、自驅らその美神を絞殺するに至るまで、僅かに3年の期間」とある。両者の書き出しは似ているが、その違いは「彗星」と「彗星」の字句や、日仏での数え年、「自ら」が「自驅ら」と記されていることなどである。

漢和辞典では、「彗」とは、「手で草ぼうきをとる様により、はく、引いては帚の意を表す」とある。所謂ホウキ星とはそのことである。一方で「彗」とは、「生育のさかんな意、一説に、せむしの小人の意」で、この漢語には、不気味な奇怪性という意味がある。それ故に「彗星」と「彗星」では、吉凶の違いのニュアンスが存在する。

辰野隆が主催する『仏蘭西文学研究』の詩人論の内容を、菊池寛が主催する『文藝春秋』の誌上で背景的評伝に視覚を変えて、一般読者を想定して噛み砕いて書くと、「ランボオ伝」のような表現形態になった。

どちらもランボオのことは、18才で言いたい事をみんな喋り尽くした存

在と規定される。「モオツァルト」(1947・7)などでも再度、「何が本当に言いたい事なのか僕等にはもうよく判らなくなって来ている」と述べるが、ここには言語表現の極限意識とは何かというテーマが呈示されている。そして中期の「私の人生観」(1948・11)にもあるように、小林には宮本武蔵とは実行家の典型であり、近代の独創的な実験精神の先駆けとして把握されていた。小林はランボオという自らにとって深刻な対象を、文藝雑誌を舞台に、一般読者を想定して語るスタイルを模索した。ここには如何に見るべきかという認識論と如何に書くべきかという技巧論との統合的な試みがある。それは同時に、志賀直哉的な白樺派の文学から出発し、後には菊池寛にも親炙するような小林に、その初期段階から純文学と大衆文学との架橋的試みがあったことの暗示である。

小林の「ランボオ伝」は、ジャン・マリ・カレの *La vie aventureuse de Jean arthur Rinbaud, jean-marie carré, plon-paris 1926* (『地獄の遍歴者—アルチュール・ランボオの生涯』ジャン・マリ・カレ、訳者—江口清、1971年10月)を典拠にして、独自に要約したものである³⁾。ここでは先ず、江口の翻訳を参考にして、マリ・カレの目次を示し、次に、小林の全9回に亘る「ランボオ伝」にも内容に区切りにつけて目次を作成し、両者を比較してみよう。

『ランボオの冒険的生活』

序

第一部 観念の冒険者

- 1, 神童 2, 反抗精神 3, 戦争の途上にて 4, パリの呼びかけ
- 5, ミューズの殿堂 6, 二人のボヘミアン 7, ブリュッセルの悲劇
- 8, 空想の最後

第二部 現実の冒険家

- 1, 古いヨーロッパを通過して 2, 東洋の幻想 3, キプロス島の石切場

にて 4, 紅海の片辺から 5, 探検家 6, メネリツク王の隊商
7, ハラルの代理店

第三部 敗北者

1, 帰還 2, 改宗と、そして死

以上が原文の目次であるが、小林の「ランボオ伝」に彼が使用した語句を基にして目次を付ければ、以下の様になる。((1)～(9)は連載の回数番号)

(1)《序》【無類の奇譚】

I章,《夢における冒険》【早熟の天才】【家出】【巴里へ出発】(2)【ヴェルレエヌとの出会い】【二人の放浪者】(3)【ブラッセルの悲劇】

II章, (4)《現実における冒険》【ヨーロッパを廻る】【東洋の夢】(5)【ジプル島の石切場】(6)【アラビア半島のアデン】(7)【探検家と地理学者】【隊商の編成】【ハラルの代理店】

III章, (8)《運命の帰還》【最後の地獄】(9)【改宗と死】

マリ・カレの原書は1926年に刊行され、今日ではランボオ論の古典的入門書である。小林は同時代人として、逸早くこの原書を訳読し、その祖述の書き直しを試みた。

マリ・カレはランボオの生涯を年代記的に少年期から『地獄の一季節』執筆までの「観念の冒険家」と、その自らの著作を焼いてヨーロッパからアフリカに至る「現実の冒険家」との時期にわけた。そして右膝を切断し、故郷に戻ってきた時期を「敗北者」という様に、三部構成したものである。後のランボオ研究史では『地獄の一季節』の焼却ということが、あやしい事実であることが議論になった。また『地獄の一季節』の執筆後に、『イリュミナシオン』に手が加えられたことも判明した。橋本一明は、こうしたラコストなどの実証的な労作により、小林の「ランボオ I」にある、「吾々

は彼の絶作『地獄の一季節』の魔力が、この作品後、彼が若し一行でも書く事をしたら、この作は諒解できないものになると云う事実にある事を忘れてはならない」の所論は、ジャック・リヴィエールのそれと同様に、排除されるべきと言った。しかし、大岡昇平の証言によれば、小林はそのことで彼自らの視点を変更することはなかった。初版本が本屋の倉庫から発見された事実があったとしても、ランボオが文学と決定的に離別したことの意味に変わりがないと言う。宇佐美斉も、ランボオの「読者の理解を得ようという試み、それは単独者としての視座を守り抜こうとするものの眼には、恥ずべき甘えとうつつた」と言い、マリ・カレや小林と似た主張を継承している。それはどこまでも、孤独なランボオの精神的危機というものに焦点を当てた立場なのである。

マリ・カレと小林の序の書き出しは個性的違いがあるが、両者の全体構成は、ほぼ同じである。だがそこでの小林の祖述的書き直しは、分量的には原文の5分の1程度に縮約されている。

細部を比較すれば両者の違いは多い。特筆すべき点はヴェルレエヌとランボオの不倫関係、アフリカでの少年ジャミとの関係などの猥褻問題が小林には省かれる。またマリ・カレはランボオと同郷の出身であり、フランスのシャルルヴィルの風景描写が刻銘である。またパリやヨーロッパ全土およびアジア・アフリカの景色が詳しく描かれているが、小林の風景描写は簡潔である。マリ・カレのものは、ランボオの代表的詩作が所々に引用されるが、小林は詩に関しては、ごく僅かしか引用しない。また、マリ・カレの第一部の「4、パリの呼びかけ」の「見る人」の手紙に関するものと、第一部「8、空想の最後」の、『地獄の一季節』の中味に関する二つの論考も、小林には省かれている。

しかし、やはり通低的には両者は同類の印象がある。それはマリ・カレが部立ての巻頭詩として引用した、「ああ肉体は哀しきかな！そして私は、ありとあらゆる本を読み。遁れよう！遁れよう、彼方に！私は感じる、

鳥たちが未知の水泡と大空の間で、酔い痴れているのを！ マラルメ」(第一部 観念の冒険者),「決して疲れぬ呪いはお前の足跡を地平線が導く世界の果てまで導いてゆく。ヴェルレエヌ」(第二部 現実の冒険家),「女たちは、灼熱の国から帰って来たひどい患者たちを看病する。ランボオ」(第三部 敗北者)といった詩的言語が、小林の文章にも挿入される。そして他界に誘われ、辺境を流離しながらも、いつもシャルルヴィルという家郷に戻ってくるようなランボオという冒険者の評伝的構成を踏襲している。また小林がマリ・カレの原文を選択した理由に、次のようなマリ・カレの態度があったであろう。次にその序文の一節を引いてみよう。

私の目的は、より謙虚である。私はおそらく、超人間的な彼を定義づけるよりも、天才であり反抗的な、悲惨であり苦悩する人間の姿を再生させようと、つまりジャン・アルチュル・ランボオを蘇らせよと試みるだけだ。(中略)嫉妬する運命に打ち倒され、その愚かな冒険によって涸れ果て、人々や神々から見放されて、嘗て自らの天才を捨てたようには容易に生命は捨てることが出来なかった彼を示して、そのありのままの姿を再現することは、より悲痛ではないであろうか。イカロスの失墜ほど悲劇的なものはない。

私はこのささやかな物語が、できるだけ無私で正確かつ適切であり、活力に溢れたものであるようにと、またこれは必ずしも容易ではないが、厳密に年代記的な役目を果たすようにと努めていることを、読者が感得されることを切望する。

ここにはマリ・カレの基本的な創作態度が表明されている。それは同時に小林の「ランボオ伝」の特質でもある。「ドストエフスキイの生活」(1939・5)の序「歴史について」に、「死児の顔を描くに事を欠かぬあの母親の技術」と言われることの萌芽が、「ランボオ伝」にある。このことは小林

にとって歴史意識の端緒という大きな意味を持っているように考えられる。

(1)の《序》から、ランボオの文学は1870年から1873年の期間であり、彼は18才で言いたいことを表現し尽くし、アフリカの砂漠に消え、そこには、お釈迦様にも匹敵するような無類の奇譚があると語られる。以下、小林の本文に即して、この物語的評伝を年代記的に要約しながら再構成してみよう。そして主要な本文を取り上げて、小林の思想と記述形式の特質を検討してみたい。

第I章の《夢における冒険》【早熟の天才】から、ランボオの生い立ちが語られる。彼は1854年10月20日にシャルルヴィルに生まれ、幼い頃に両親が離婚する。10才でコレッジに入学し、15才でラテン語競争試験で一等を取る。

【家出】当時21才のイザンバルと出会い、1870年に家出して巴里へ行き、マザスの牢屋に入り、9月にシャルルヴィルに帰る。10月に新聞記者になるためにベルギーのシャルルロアに行くが断られ、ブラッセルのドウエ宅に泊まり、11月にシャルルヴィルに帰る。12月に独逸軍が攻めて来るが、ランボオは街を横行し、また図書館に閉じ籠もった。

【巴里へ出発】1871年の1月に巴里が陥落し、2月の末に懐中時計を売って巴里へ出発して、漫画家ジルの家に寄り、3月にシャルルヴィルに帰る。再度、巴里に行き、革命暴徒に身を投じる。8月「酔いどれ船」を書き、ヴェルレエヌに送る。9月にドラヘイと街を散歩する。

小林の第(1)回は、マリ・カレが分量的には全文の3分の1を費やした第一部 観念の冒険家「5、ミューズの殿堂」までを要約したものである。マリ・カレは「4、パリの呼びかけ」の中で、ランボオによる1871年5月13日のイザンバル宛と15日のドゥムニー宛の「見る人」の概念に関する手紙を取り上げて詳論する。だが、小林は、この手紙には全く触れて

いない。後の「ランボオⅢ」(1947・3)で、この手紙のことは、「詩人は、あらゆる感覚の、長い、限りない、合理的な乱用によって千里眼になる」と訳読されたが、むしろ「ランボオ伝」とは、こうした形而上的な難解さを削除したところに出来上がっている。だがそれは思想問題の本質を回避するのではなく、評伝の具体的描写の中に昇華されている。それはランボオが巴里の革命暴徒に身を投じた時期の描写にも現れているので、そこを引いてみよう。

ルイ・ブランヤサン・シモンを夢中で読んでいた彼の革命精神のロマンティックな背光は恐い幻滅を感じた。彼は毎日苛々し乍ら陰惨な顔をして、ボロボロの着物を着て、パイプを銜えて街を歩いた。子供達はこの気狂いに石を投げた。

或日一人の紳士がランボオの髪があんまり汚く延びているのを見兼ねて、「ねえ君、床屋に行ったら如何だね、さあお金をあげよう」。ランボオは黙って金を受け取るとすぐ傍の煙草屋に入って上等の葉巻を二本買った。呆れてこれを眺めていた紳士の処に戻って来るとランボオは一本を口に銜えて一本を紳士に差し出して、「さあ、貴方が一本！」。

ランボオが実際に革命に身を投じたかどうかには議論があり、その実証的事実の確定には困難がある。しかし小林はマリ・カレの視点に倣い、さらに彼自らの想像力で、こうした場面を語っている。紳士に対して、「さあ、貴方が一本！」と颯爽と煙草を差し出すランボオの描写は絶妙であり、原文からは飛躍した小林独自の表現である。

原文では、煙草を買う場面は、「彼は特に田舎の煙草売りの鷺のような鋭い目つきをして、鉤形の鼻をした老婆が嫌いだった。彼はハンティングをあみだにかぶり、陶製の短いパイプを口に銜えて店に入ると、命令するような口調で言うのだった。『きざみ煙草を1スー！』また彼はときどき

気分転換に散歩道のベンチや教会の扉の上に、白墨で大きく『神さま、くたばれ』と書きなぐった」と時代社会に一致点を見出しえなかったランボオの忸怩たる反抗心が描かれている。この場面の次に、「見る人」の手紙の意味が展開されてくる。だが、小林はマリ・カレを手本としつつも、心理的に陰惨な部分を削除して、自らのランボオ像を、より爽快なものとして再創造した。

第(2)回の【ヴェルレエヌとの出会い】は次の様に展開する。二人はパリで出会い、最初の晚餐が開かれる。毎日二人で酒場に通う。1872年の1月から、バンヴィルの家やシャルルクロスの仕事場そして屋根裏へと移り住む。ルベルティとの喧嘩がある。ランボオの事を、ユーゴーは「少年シェイクスピア」、マラルメは「偉大なる行人」と叫んだ。4月に巴里を去る。「母音」「風を捜す女」などの詩は6ヶ月の巴里生活で書かれた。

【二人の放浪者】ヴェルレエヌは5月にランボオを巴里へ呼び戻す。7月に二人でベルギーに行き、警察に捕まるが放免され、ブラッセルに行く。7月21日にヴェルレエヌ夫人は夫を見つける。(3)母と妻を撒いたヴェルレエヌはブラッセルでランボオと一緒にになり、ロンドンに行く。ヴェルレエヌの離婚訴訟が起こる。『イルミナシオン』を書き上げたランボオに残された仕事は、『地獄の一季節』であった。12月にランボオは姿を消す。ヴェルレエヌは『言葉なき歌』を書く。

【ブラッセルの悲劇】ヴェルレエヌは病気になるが、その母の尽力で1873年1月にランボオと再会すると病気は治る。ランボオはローシュで『地獄の一季節』を書き始める。5月にブーイヨンでドラヘイを交え3人で会う。二人は英国に行くが、ランボオの願いは英語を征服することであり、ヴェルレエヌとは喧嘩になる。7月にランボオはブラッセルのヴェルレエヌの所へ行き、有名なピストル事件が起こる。この場面は小林に次のように記述する。

ランボオがブラッセルに着いた時、ヴェルレエヌは始末にならない興奮

状態にあった。一緒に巴里に行かうと言うかと思へば、巴里はあんまり悲しい思い出で一杯だから厭だと泣き出す。而も毎日朝から呑みつづけた。

或朝六時頃ヴェルレエヌは下宿を飛び出してへべれけになって昼頃帰って来た。ランボオを見るとポケットから、ピストルを取り出し「ホラ、こいつを買って来た」「そんなもの何にするんだ?」「こいつは君にいたんだ、いや俺にいたんだ、つまり全世界の為なんだ」こう言い捨ててヴェルレエヌは又呑みに出掛けた。やがて帰って来たヴェルレエヌはドアに錠を下すと、そこに椅子を据えて腰を下した。ランボオは向う側の壁に凭れて立っていた。「さあ貴様行くなら斯うだぞ!」と言い乍らヴェルレエヌはランボオを覗いてピストルを二発発射した。最初の弾丸は、ランボオの左手に命中した。大変な事をしてしまったと気の付いたヴェルレエヌは気狂いの様に隣室にかけ込んで、続いて入って来たランボオの手にピストルを持たせ、殺してくれと駄々を捏ねた。

二人の交友に関しては様々な説があるが、マリ・カレは二人の間にヴェルレエヌ夫人が疑ったような不倫関係はなかったと言う。そしてこの部分を、ランボオが予審判事の前で為した陳述を記すと言う方法で語った。マリ・カレは、「ヴェルレエヌが最も大きな過ちを犯したのであって、アルコールの力によって一層過ちを増大させ、あの愚かしい加害事件ひきおこすに至った」とし、ランボオはヴェルレエヌから遁れるために彼を逮捕せしめたと解釈する。小林はこうした見方に共感しながら、先に引用したような描写をする。

「ランボオ I」(1926・10)ではこの場面を、「性急な絶対糾問者と人間性に酩酊する詩人との間に当然の破綻が起らねばならない。終末は、1873年7月ブラッセルに於ける驚くべき喜劇に終わる。(中略)この時、二人の魂は相擁して昇天しなければならなかった」と言われる。「性急な絶対糾

問者」という言葉も一般的な用語ではない。漢語辞典には「糾問」とは「罪を問いただすこと」とある。それは、自己の生の究極の根柢を問うことに取り憑かれている存在という意味である。この場面を、「驚くべき喜劇」という言葉に籠めた真意も難しい。だが「ランボオ伝」の方では、そうした相反両立的な思想的意味よりも、日常語を使いながら具体的な臨場感を出す描写に力点が置かれている。

この後、ヴェルレエヌは拘留される。ランボオはローシェの母の許に帰り、『地獄の一季節』の最期の頁が書かれ、10月に出版されるが、12月にその殆どが焼かれる。ここでランボオの文学的生涯が終わるというのが、マリ・カレの第一部の構成である。ヴェルレエヌが、「悲しい思い出で一杯」と言った二人のパリでの生活は、もはや取り戻しの付かない所に来てしまった。そしてそのことが、近代詩の一つの源流にもなったのである。先にも述べたように「8、空想の最後」は、独自の『地獄の一季節』論であるが、小林はこの部分を全く削除した。

第(4)回から、第二章の《現実における冒険》に移行する。この世に於いて、夢と現実を分かつことの出来ない所に、物語が生起する理由があり、そうした矛盾の渦中を前人未到の冒険者として生き抜いたところにランボオという人間の魅力がある。そうした事実の痕跡は、初出の「ランボオ I」(『仏蘭西文学研究』)には、次の様に語られている。

12月、ランボオは、ローシェに帰り、手元の原稿全部を焼棄して、永遠に文学の世界を去った。1891年、アフリカで滑液膜炎に罹り、マルセイユの病院に送られた。其処で、この大歩行者の片足は切断され、12月10日、37才でこの天才は、一商人として死んだ。当時彼の唯一人の看取りであった妹イザベルは、「死に行くランボオ」の痛ましい姿を書いている。

文学に離別して以来、殆んど20年に近い漂泊である。彼は、ナポレオンの如き神速を以て、その到る処の国語を征服しつつ転々した。英国、独逸、

伊太利、西班牙、ジャヴァ、スカンジナビア、エジプト、ジブル島、アラビヤ、エチオピアと。彼は、英国ではフランス語の教師であった、西班牙では、ドンカルロス党员であった、ジャヴァでは和蘭陀の志願兵、スカンジナビアで曲馬団の通訳、アフリカ内地では、珈琲、香料、象牙、並に黄金の商人、隊商の頭、探検家、…長々しい。諸君は彼の義弟パテルヌ・ベリシヨンの無類の奇譚を読まれんことを。

全集の版では、この後に「或いは、ジャン・マリ・カレのものする無類の奇譚を読まれんことを」と付加された。こうした「ランボオ I」の大まかな叙述で、詩人論としては事足りるとも言える。ランボオに関する年代記の提示は、専門家集団には無意味であろう。卒業論文を書き直した専門誌の表現形態では、パテルヌ・ベリシヨンなどの出典を明示しておけばよかった。その後、小林はマリ・カレの原文と出会った。そこには自分の抱いていたランボオ像と近似する詩人の生涯が克明に描かれていた。時系列的にも自らの直観に合致したから、「ランボオ伝」の祖述対象に選んだのであろう。如何なる経緯で『文藝春秋』での執筆権利を獲得したかの事情は定かではない。だが、小林が所属する専門領域の枠を突破し、月刊の文藝誌で一般読者を対象に、詩人の冒険的生活を年代記的に描写したのが、「ランボオ伝」なのである。そこに模索された評伝には、文学論の枠を超えて、その後の多産的な思想論としての萌芽を見出すことが出来る。

現実の冒険の話は、【ヨーロッパを廻る】ところから始まる。1873年12月に19才のランボオはヌウボオとロンドンへ行く。1年で英語は征服され、独逸へ行く。1875年にヴェルレエヌはモンスの牢屋を出て、ドラヘイにランボオに会わせてくれと頼む。宗教的回心をしたヴェルレエヌはランボオに説教を試みるが失敗する。ランボオはドイツ語を征服し、スイスからイタリアに行く。ミラノで金持ちの未亡人に助けられ、マルセイユの波止場で荷揚人足をしたり、スペインのドン・カルロス党员になったりして、シ

シャルヴィルに帰る。この年の冬は狂熱的に外国語の勉強をした。

【東洋の夢】年が明けて、東洋の夢に取り憑かれる。ロッテルダムでジャヴァ派遣の兵隊募集に応じ、6年間の契約を結ぶ。船は6月に出帆し、コロンボからボンベイへ行き、ジャヴァ島の兵営に入ったが、得意の逃走を決める。バダヴィヤまで逃げて商船の水夫になり、喜望峰、セントヘレナを経由して、ノルウェイを廻り、マルセイユに着き、大晦日に徒歩でシャルヴィルに帰る。1877年には、オーストリアからバニユープを経て黒海に出て、小アジアに行くことにしたが、浮浪罪でフランスの巡査に渡され、シャルヴィルに帰る。だが間もなくランボオは徒歩でオランダからハンブルクに出て、曲馬団の通訳としてスウェーデンなどを巡業する。ストックホルムで捜索願に拠って捕まり、シャルヴィルに帰る。東洋行きは彼に付き纏い、マルセイユからアレキサンドリアに向けて出発する。だが、病気になりローマを廻って帰ることになる。

(5) 【ジブル島の石切場】1817年からジブル島の生活が始まる。春から夏はハンブルグへ行き、地中海をうろつく。11月に遠征を決心し、アルプスを越えイタリアからアレキサンドリアに行く。12月に労働者の通訳監督となりジブル島に渡る。ラルナカで煉瓦を焼く窯の番をしたり、運河工事などの監督をする。この頃、給金の強奪事件が起こるが、名監督振りを発揮する。7月には暑さで労働は不可能になり、故郷へ帰る。ドラヘイがランボオと会い文学のことを訊ねると、「全然おさらばだ」と答えた。またピエルカンが本の自慢をすると、「なんだいそんな本、ただ棚に並べて壁の汚れを隠すより他能がないじゃないか」と答えた。1880年の春にアレキサンドリアに向けて出帆し、ジブル島を通り、エジプトに行った。

(6) 【アラビア半島のアデン】1880年8月にアラビヤ半島のアデンに着く。そこでバルディの店で働くことになった。

第二章の特質は、ランボオの手紙を翻訳しながら、その生活を辿るとい

う構成である。1847年3月の手紙は次の様なものである。

一本の樹もない、一きれの草もない、一塊の土もない、一滴の清水もない。アデンは底に海の砂のたまった死火山の噴火口さながらだ。見るもの触れるものすべて溶岩である……火山の岩壁が通風を防げて、吾々は石灰窯の中で焼かれる様に、この穴の中で焼かれている。こんな地獄で使はれるには運命の犠牲とならなくてはならぬ。(ランボオ伝)

小林の訳読は、原文をかなり縮約した意識である。この手紙は、「ランボオⅢ」にも引かれたが、そこでは幾つかの訂正が施された。中でも、*Il faut être victime de la fatalité pour s'employer dans des enfers pareils!* が、「こんな地獄へまで使はれに来るとは、よくよくの宿命の犠牲者に違いない」と訳し直される点の特徴的である。犠牲の不可避性と複数形の *des enfers pareils* が、「こんな地獄」と訳読されることには変わりがないが、*la fatalité* が「運命」から「宿命」に変更されている。また小林は別のところで、《*Une Saison en Enfer*》に関して、「直訳すれば『地獄に於ける或る季節』となります。つまり、ランボオにとっては、ここに描いた地獄は単なる文学青年（彼にとっては文学とは文学青年の事業です）の地獄である、この世という地獄には色々な季節がまっているという処から「或る」とことわったものと思考いたします」（『地獄の季節』訳者後記Ⅰ、1930・10）と述べる。一体、ランボオは何の犠牲になったと小林は見なしているのだろうか。「ランボオⅠ」では、彼は芸術を聖化したという認識が述べられていた。

「ランボオ伝」では、《*Une Saison en Enfer*》は、より一般的に、『地獄の一季節』と訳された。だが、その季節は *des enfers pareils* として廻ってきた。「ランボオⅢ」における、「よくよくの宿命の犠牲者に違いない」という訳文には、青年期からの予感が的中し、そうした自業自得を砂漠の

現実で、実際に噛みしめている孤独な姿が濃くなる。こうした「宿命」とは個性の内的必然性を意味し、小林を読み解く上での重要なキーワードである。ところが、「ランボオ伝」では、「宿命」という言葉は、一度も使用されていない⁴⁾。こうした言葉の転義は、いわば共同性と個性の差異をめぐる認識と関わりがある。そして「運命」とは、より共同に関する言葉である。そこには現実に過酷なアデンで死んでいく、多くの仲間の労働者達との運命共同体的な状況認識がある。しかるに、「宿命の犠牲者」とは、かって『地獄の季節』を書いたような芸術的個性という意味合いが強くなる。マラルメに倣い、「ただ彼が現存するという動機によって点火された流星の光輝」(「ランボオⅢ」)を描き、そうした唯一の個体を通して、「ランボオという名さえ偶然と思われるほどの、或る普遍的な純潔な存在」(「ランボオⅢ」)を引き出すのが小林の本領であった。そこには個別の具体性を通さなければ、真の普遍には至らないという認識がある。だが、「ランボオ伝」では、最初から、所謂「伝説の中の人物」に焦点が当てられ、詩作の意味にはあまり触れず、どこまでも一般的評伝のイメージを創作することに徹している。いわば大衆にランボオという稀有な存在を開示しようとしたのである。

この手紙の後、ランボオはエチオピア地方に向かい、1880年12月にハラアに着き、珈琲や象牙の取引を始めた。1881年1月にアデンに帰る。母はランボオの注文を拒否する。1883年の初め、再びハラアに来たが、エジプトとアビシニヤの間に戦闘が開かれ、商売が途絶える。ランボオには「疲れる事が出来ない呪詛」が付き纏う。

(7)【探検家と地理学者】1883年は、探検家と地理学者として活動する。この年の終わりにハラルの代理店は閉店し、アデンに戻る。ランボオは煩瑣な用事と無活動ですっかり凹たれた。この頃アビシニアの女と同棲する。母から帰国を要求される。そして、ランボオの詩は巴里のサンボリストの注意の焦点になっていた。1885年の暮れにパルデイの店で喧嘩をして飛び

出す。

【隊商の編成】ランボオはフランスから小銃を手に入れ、カオの酋長メネリツクに売る計画を立てる。1886年12月に、隊商を編成してタジューラを出発した。砂漠と岩山を横切り、70日の苦労の末、翌年の2月6日にアンコベルに着くが、メネリツク酋長の姿がない。アントトで酋長を捕まえるが、商売は巧くいかない。

【ハラルの代理店】3月1日にアントトを捨てて人跡未踏の道を辿って、3月20日にハラルへ着く。ハラルは不潔極まる町と化していて、ランボオはカイロへ向かう。ハラルの酋長に銃を売りつける計画を立てるが失敗する。(8) 1888年3月にゼエラアに向かって出発し、今度は銃が巧く売れてハラルに店を張る。商売は順調に進む。1890年10月に母親に出した手紙は、「来年の春位には国に帰って結婚出来るかもしれません。私の旅行と一緒にくっついて来られる様な女がいるかしらん？」というものであった。だが、その望みは遂に実現されず、運命は彼を覗っていた。

第3章《運命の帰還》は、この辺りから始まる。第一章と第二章は、マリ・カレの原文を縮約的に書き直したものであるが、第三章は、そのほとんどを忠実に祖述している。小林の焦点は、始めから第三章の孕む意味にあったと考えられる。ただマリ・カレがランボオのことを「敗北者」と呼んだことには違和感があったのか削除している。最後の場面は重要なので、少し詳しく辿ってみよう。

【最後の地獄】1891年2月に右膝の痛みが始まる。彼は築き上げた商売の地盤を見捨てた。300キロの道を昇台に凭れて移動し、ハゼーラの港からアデンに送られて入院する。フランスへ帰る決心をして紅海の港からアレキサンドリアと地中海を過ぎ、マルセイユに着き、そこで右足は切られた。片足が無くなった彼は全く絶望した。彼は妹のイザベルに、「俺は夜昼泣いてばかりいる。死人も同然だ、もう、一生涯不具なのだ、人生は畢

に一つの悲惨である。終る事のない悲惨である！ああ、何故に吾々は生存しているのか」と手紙に書いた。そして妹の骨折りで徴兵忌避問題は解決する。(9) 7月になって松葉杖で病室を歩けるようになった。しかし、彼の手紙には、「この一夏には結婚しようとフランスに帰る決心をした俺じゃないか！結婚よ、さよなら、家庭よ、さよなら、未来よ、さよなら！俺の生涯は終わった。俺は、はや動かない切れ端に過ぎない」とある。ランボオの心にはストイックな忍耐も諦めもなく、全く絶望した一人の男であった。20年ぶりに田舎に帰り、イザベルは彼の姿を見て泣いた。ランボオは毎日どんな天候でも午後は町を歩かせた。病気は悪化し、松葉杖もつげなくなり、不眠の夜が続き、鎮痛剤に麻酔薬を使う。彼は古いハンドル付きのオルガンを鳴らしながら歌を歌った。その様子を妹は、「彼は、歌詞に、東洋的なスタイルの語法や、東洋の知らない国々の言葉をよく混ぜていた、彼の少し間ののびた哀切な声は、心に沁み入る様な美しさの抑揚を持っていた」と書いている。彼は麻酔剤の故に寝台から墜落し、それ以後は麻酔剤による療法を中止する。1891年8月23日に最後の南方旅行を企てるが、前進不可能となる。息子は死に掛けていたが、母はロオシェで膨れ面をしていた。

【改宗と死】イザベルの願いは兄に何とか安らかな死を遂げさせることであった。だがランボオは安らかな死を遂げるどころではない。彼はどうしても死にたくない。敬虔なカトリック信者である妹は、異教徒である兄の心を何とか鎮めようとした。

ランボオの病床での改宗と臨終は、小林に次のように語られる。重要なので最後の部分をそのまま引用してみよう。

イザベルは言う、「彼は、目覚めて、夢の様なものを見続け乍ら、死んで行った。彼は色々不可思議な事を言った。その静かな声は、心を貫く様に美しかった。彼は夢の事を喋っているのだが熱に浮かされた時のとは全

く違っている、他の人だったら必度故意にしているのだと言うだろう。彼は何んでも皆ごっちゃにして喋った、而も巧みに」

嘗って、イリュミナシオンを創り上げた、この天才の死に行く脳髓に、如何んな燦然としたエチオピア隊商の夢が横切ったか、サマリの砂漠が如何んな清らかな姿で現はれたのか、吾々は全く知る事は出来ない。12月9日、ランボオは、商船会社の支配人へと、妹に「出帆の時刻は幾時に候や」と口授した。死の船は翌日やって来た。享年37。数日後、彼の死体はシャルヴィルに到いた。そしてこの町に埋められた。

マリ・カレの描写はもう少し複雑であるが、小林はそうした原文を意識的に〈模倣〉再現することで、この場面をより純化した表現として再創造した。絶望的状况にありながらも何とかして生きたいというランボオの姿は実に痛ましい。こうした死に行くランボオの生存の苦痛に小林は心から同情と哀れみの思念を抱いているように見える。ランボオの冒険は、原郷世界という他界に誘われ、地獄のような辺境をめぐりながらも、故郷を思うような彷徨であった。そこには文明に対する反感と自然に対する共感の絡まりが、呪的な作為として詩作に定着している。

そして病院のベッドに横たわったランボオはいわゆるモンスター・ペイシャントの一種であった。だが、妹のイザベルは献身的にも兄に安らかな死を遂げさせたいと願った。それは兄を改宗させることが、自らの信仰の証であったかのようなのである。その代償として、ランボオの極めて神秘的な最後の詩を間近で聞いた。ランボオはイザベルが信じるなら、二人は同じ魂を持っているのだから、自己自身も信じられると言う。こうした信頼関係から、ランボオが妹のために祈ったと理解も出来るが、この場面の心理的解釈を小林は一切語っていない。そしてランボオの臨終に最大限に接近しながら、その死に行く脳髓にどんな夢が横切ったかは、私たちには全く不可知と言う。こうした所には小林の死生観の本質が現れている。「ラン

ボオⅢ」の最後のクローデルへの言及なども参照して、改宗と臨終の場面は再考する必要があるが、ここでは所謂、小林の孤独な宿命の理論の萌芽が暗示されている事を確認しておきたい。

Ⅲ 「バルザック伝」「バルザック逸話集」の位置

「ランボオ伝」の連載は1928年5月に終了する。当時の小林秀雄は、同月に長谷川泰子と別れ、大阪に行く。後、奈良市の料亭「江戸三」の離れを借りて住み、同市幸町の志賀直哉家に入出入りしていた。いわゆる関西地方への放浪の時期である。この時、中原中也は周囲の人々に、小林がきつと自殺を計るに違いないとふれ回ったらしい⁵⁾。江藤淳は「眠れぬ夜」は、実はこの初夏の時期に書かれたのではないかと指摘する⁶⁾。研究史的にも、この翌年にかけての放浪の時期は謎が多い。

本稿の冒頭にも述べたが、1928年6月号『文藝春秋』に匿名で掲載された「バルザック伝」「バルザック逸話集」の作者は小林秀雄ではないであろうか。ボオドレエルの影響が顕著である「眠れぬ夜」と、それに反して奇妙に風通しが好いようなバルザック論では性格は対極的な文章である。だが、むしろそうした極度の相対感覚の連続的な実現が、彼という思想家の特質なのではないであろうか。江藤淳の整然とした『小林秀雄』論は今日でも卓見に満ちている。しかしそうした秩序的整理をさらに反転させる未分化の混沌が、この時期の制作生活にあるように思われる。

「バルザック伝」は、最後に（続く）とあるが、それ以降は再開されなかった。夏が過ぎて9月から「ボオドレエル伝」（1929年12月まで）が始まるからである。「バルザック伝」には並列的に「バルザック逸話集」なる無記名作品が添付されている。この時期に、その具体的内容は資料が残っていないために不明であるが、関西学院で「文学に於ける写実と象徴」（1928）という講演が行われた。

この時期に関しては、編集者の郡司勝義に詳しい証言がある⁷⁾。小林の作品中では「処女講演」(1940・12)や「秋」(1950・1)に、その辺りの事情が書かれている。だが、そうした文章の真意を探れば謎は深まるばかりである。こうした一個の人間の内的劇が、日本近代思想史における文学的事件だからである。そして「バルザック伝」「バルザック逸話集」の作者が小林であるなら、この謎の時期に関する最も直接的な文献ということになる。「様々なる意匠」(1929年9月)「志賀直哉」(12月)という代表作の背後に、いわゆるフランス文学者に関する大衆文学的な物語の評伝がある。「文学に於ける写実と象徴」という処女講演も、その具体的内容は、こうした物語の評伝を踏まえた語りであったと推察される。そうした表現行為は、彼自らの実生活的混乱の渦中で行われた。

勿論、本人や周囲の人々も存命していない以上、「バルザック伝」「バルザック逸話集」を小林作品と性急に断定することは出来ない。しかし当時の『文藝春秋』の無記名コラム欄の中でも、この文章は「ランボオ伝」と同様に際立っている。こうしたコラムはスペース的には頁の最下段横長の埋草原稿に過ぎなかった。だが、内容は単に奇を衒ったものでなく、何よりも歴然とした表現の勢いがある。

「バルザック伝」の書き出しは、「オノレ・ド・バルザックは、1799年、ツールに生れた。少年時代は、別に面白い話もない、尤も少年時代に天才の萌芽を見つけ出すという芸当が、凸凹伝記作者等に出来ないというだけだが。後年、毎日18時間づつ書きつけても喋り度い事が喋り切れなかったという怪物に生長しただけあって、彼は恐ろしくお喋りな小供だったらしい」と切り出される。最初から自らのことを「凸凹伝記作者」と呼ぶ辺り、風変わりな匿名作者である。この評伝も年代記的な文章である。以下、内容を要約しながら問題点を検討してみよう。

「バルザック伝」

【お喋りな子供】オノレ・ド・バルザックは、1799年、ツールに生れた。お喋りな彼は、14才の時、ロールという妹に「偉大な人物になる」と言ったが、それを聞いた妹は大きな声で笑った。翌年、一家は巴里に移り、彼は寄宿舎に入る。続いて法律学校に入り、ソルボンヌの講義を聞いた。

【偉大な職業】或る日、親父は、弁護士になる気はないかとオノレに訊ねた。彼は、「偉大になれない職業なんて真平だ」と答えた。間もなく、バルザック一家は、郊外のヴィルパソジに引っ越す事になったが、オノレは如何しても巴里に居ると頑張った。

【戯曲の制作】1819年の8月に屋根裏部屋で「クロムウエル」という戯曲を書き初めた。翌年4月「クロムウエル」は完成し、一家では楽しい晚餐が開かれ、戯曲を朗読する段になった。だが、最初の行を読み始めるや、忽ち韻の踏み方が自分で気に入らなくなり、途中で中断し、庭で一人泣いた。間もなく、妹のロールは結婚して、オノレは、又、家根裏から家に帰った。

【ベリニー夫人との出会い】或夜、バルザック夫人は近所のベリニー家を招待した。オノレは、このベリニー夫人にすっかり感動して了った。彼は夫人の顔を見なければ一日を過されなくなった。そして大袈裟な恰好で胸の裡を打ちあけた。彼が後に「男の最初の愛を満足させるものは女の最期の愛を置いて他にない」と書いた如く、二人は美しい愛情で結ばれた。ベリニー夫人はオノレの金銭上の悪闘時代になくはならぬ人となった。
(続く)

冒頭の【お喋りな子供】で、彼の青年期は次のように描写されている。

斯うして20才までの才月は、巴里が供給する奔溢する夢の裡に、矢の如く過ぎた。彼が最も恐れたことは、無駄な時間を潰すという事だった。彼

の頭は、あらゆるものを吸収するに多忙で、毎日取り逆せていた。彼は、毎日、凶々しくもセーヌ河岸に並んだ古本屋で三時間は立ち読みする事に決めていた。余っ程、安くて小さな本でなければ買って来ない。夜は、母親が掃除する事はあきらめた原稿紙の屑の堆積する自分の部屋に蠟燭をつけて、夜明までソフォクレスを読んだ。

こうした所には、「まだ春も早い薄ら寒いこの海岸を、猛烈な知識欲に襲われて一体何から手を着けていいだろうと途方に暮れてはつき歩いた」（「蛸の自殺」1922・11）という20才の小林自らの姿が投影されているであろう。若年の彼は、「五円札を握って丸善に這入る、何れを買ったら善いか結局解からなくなって（如何してあんなに暢気に本が買えるのかしらん）と、中のお客に向っ腹をたてて泣きたくなる様な気持ちで飛び出した」（「同右」）のであった。「蛸の自殺」の主人公（謙作）には、その悲しみと同時に、どこか虚無的な苦笑が付き纏う。また「鉛」（1924・8）などの短編には喜劇的の笑いが意図されているが、そこに登場する青年にも同様の性格がある。背後にどうしようもない悲しみがあって、喜劇の意図がそれを全う出来ずに悲喜劇に流れてしまい、チェホフのようには微笑することが出来ないのである。

一回で頓挫した「バルザック伝」は、私小説ではなく喜劇的に笑えるような評伝として書かれている。その意味では彼の意図と効果は、一回性において成功した。だが、それを中篇以上の長さに仕上げることは出来なかった。おそらく続ければ途轍もない長編になってしまうことを予感し、その意図は内面に深く折り畳まれ可能性がある。行き当たりばったりと言えば、そういう性質のものである。客観的な年代記としても明らかな誤記・誤植が目立つ。

いずれにせよ「バルザック伝」は書き出しの段階で、躓いた印象を受ける。しかし著者の止まることを知らない創作意欲は、「ボオドレエル伝」

の構想に移行した。そして「バルザック伝」の付録として準備していた連載のための話の種を、編集者との遣り取りで同号に並列的に掲載したのが「バルザック逸話集」ではないであろうか。そのことで同月の原稿料は2倍になったかも知れない。京都に親戚の援助者もいたらしいが、関西での生活的逼迫を自力で埋めるために『文藝春秋』に原稿を送った可能性がある。「バルザック逸話集」も次に要約してみよう。

「バルザック逸話集」

【尊大かつ傲慢な発言】或時、バルザックは、文学者のシャンフルウリイに向って、「君が己に似ているそうだが、何にしても、こいつは喜ばなけりゃあならんねえ、君にとっては」と言った。また、バルザックが余り一生懸命に働くので心配した友人が、「そう君のやうに働いてはいけない。是非、少し遊んで、体を休めたらどうだ」と勧めると、「人生とは、勇氣である」と毅然と答えた。

【珈琲好きと健啖家】バルザックの珈琲の淹れ方は、天才的であった。ブールボン・マルチニグ・モカの三種を巧妙に交ぜた。これをうまく煮て、飲むと傑作が立ちどころに成った。また料理屋で、一人で昼飯に食った料理は牡蠣を百個、羊のカツレツ十二個、家鴨の雛一羽、焼鶉二羽、舌比目魚一尾、その他前菜、野菜等であった。

【芝居嫌いと煙草嫌い】バルザックは余り劇場へ行かなかった。コメデイ・フランセエズには、一生のうち三度位しか行っていない。ヴィクトル・ユーゴーの「城主」が上演せられた時にも、芝居が退屈で仕方がなかった。またバルザックは煙草が大嫌いであった。

【執筆の様態】書齋で執筆する時は、外部と全く隔離し、窓の戸も締め、燭台二台に点じた蠟燭が机の上を照らしただけであった。夏はカシミア、冬は毛織物の仕事着で、白いだぶだぶしたものである。足には、全糸の刺繍のしてある赤モロッコ革の室内靴を履いている。そうした恰形をして世

間と全然離れて思索し、小説を書き、校正を直す。夕方の8時に軽い夕飯を食べ、眠る。午前2時に起きて机に向い、朝の6時迄再び筆を執る。やがて、1時間の沐浴をする。8時に珈琲を飲み、正午迄また働き、飯を食べ、珈琲を飲む。1時から6時迄また働き、7時から8時迄友人達と会って談笑したりする。

【『巴里クロニクル』の工面】1834年頃に、『巴里クロニクル』という雑誌を出したが、資金が足りなかった。或日、バルザックの家へ、某大銀行家の令息が訪れた。一目見て、この男は金持の子だから、出資して呉れるだらうと考え、遂に日を定めて晩餐会を開き、将来提携して行くべき同志に紹介しようという話をした。その当夜、主賓をしきりに褒めて、乾杯に際し、我等の『巴里クロニクル』に、どのやうな御助力をして頂けますかと尋ねた。主賓は立ち上って、「僕は、ともかく、うちへ帰って親父に聞いてみましょう」と言った。この語を聞いてバルザックは真蒼になり、一同もグッと参ってしまった。

【異様な風体】女流作家のジョルジュ・サンドを晩餐に招き、それが終って、異様な風体で送って行った。

この最後の描写をそのまま引用してみよう。

女流作家のジョルジュ・サンドをバルザックが晩餐に招いた事がある。さてそれが終ってサンドともう一人の相客とが帰ろうとするとバルザックは、部屋着に帽子も被らずオデオン座の所まで送って行くと言ってきかない。当時天文台通は暗かった。そこで彼は素晴らしい彫刻のしてある燭台の蠟燭に火を点じたまま手に持って歩いて行く。ジョルジュ・サンドはこのバルザックの異様な風態には恐れをなして、「もう結構でございます。どうかお引取り下さいませ。帰りに強盗にお遭ひになったり、悪い奴にお殺されなされると困りますから。」バルザックは驚く色も無く、「いや、大丈夫

です。奴等は拙者を気遣いだと思って尊敬するか、さもなければ王族だと思って、身边に護衛が附いているだらうと思って手出しはしませんよ」とやっばり蠟燭を持ったまま歩いて行った。

以上が『文藝春秋』に無記名で掲載されたバルザック論の要約と引用である。「バルザック逸話集」の典拠は、*Balzac anecdotique Jules Bertaut; choix d'anecdotes recueillies et précédées d'une introd Published 1908* である。小林の文章は、この原書から摘出された忠実な訳読である。「バルザック伝」の方は、その青年期やベルニー夫人との関係の叙述に、*Balzac Alphonse Séché et Jules Bertaut 1890* が使われた可能性がある。さらなる典拠の可能性としては、*Balzac par Émile Faguet de l'académie française 1913* などが挙げられよう。当時、翻訳されていたものとしては、『バルザック 創造的芸術家Ⅱ』（「バルザックの生涯」 エミール・ファージェ 木村莊太訳 新しき村出版部 1924年）¹⁰ などにも内容的に重なる所がある。

また、*Balzac sa vie et ses œuvres D'après sa correspondance 1858*（『わが兄バルザック』（ロール・シュヴィル 大竹仁子 中村加津訳 鳥影社 1993年）などにも、評伝の古典的位置にあるせいかもしれないが重なる所が多く、原書で参照された可能性がある。

バルザックに関しては、1931年6月に『新潮』に発表された「フランス文学とわが国の新文学」では、「ナチュラリズム文学の核心は、バルザックが既に完全に掴んでいたのですし、サンボリズム詩歌の精神は、ボオドレエルの手で明るみに出たのであります。両者の精神が、共にどうしようもない時代の色合いを帯びながらも、その本質は浪漫主義に抗する冷徹な澆刺とした批評精神であったので、明察と批判こそ、この両文学運動の動因であった」と解説される。こうした外来作家の写実主義と象徴主義によって養われた批評精神の問題は、小林に深刻な影響をもたらした。そして詩的造形が不可能という意識から新しい散文を編み出そうとする志向性は、

小林自らの意識であったと言える。こうした作家的本質に関わる問題は、1928年9月に『改造』に発表された「様々なる意匠」の一節では次の様に言われる。

「人間喜劇」を書こうとしたバルザックの眼に、恐らく最も驚くべきものと見えた事は、人の世が各々異なった無限なる外貌をもって、あるがままであるという事であったのだ。彼には、あらゆるものが神秘であるという事と、あらゆるものが明瞭であるという事とは二つの事ではないのである。如何なる理論も自然の皮膚に最も些細な傷すらつける事は不可能であるし、又、彼の眼にとって、自然の皮膚の下に何物かを探らんとする事は愚劣な事であったのだ。

物を書こうとする作家に現前する神秘性と明瞭性とは、決して二つの事ではないとは、一体どういうことであろうか。それは言語表現において象徴性と写実性とが一つになるような世界のことを指しているのではないであろうか。小林はフランス文学科の出身であり、学生時代からランボオ・ボオドレエル・ポオ・マラルメ、そしてバルザックなどの文学を専門領域とした。そして、「マラルメは、決して象徴的存在を求めて新しい国を駆けつけたのではない、マラルメ自身が新しい国であったのだ、新しい肉体であったのだ。かかる時、彼らの問題は正しく最も精妙なる「写実主義」の問題ではないか（「様々なる意匠」）と言うように、象徴と写実とを統合したような言語表現を模索していた。それは自らの夢想というものを根拠に、身を以て為される創造過程において達成される。そうした創造過程の前提に〈模倣〉という方法があり、そうした同化と再生の思想表現の手順は、小林の自己が自己であるために必須の手続きであった。

「バルザック伝」やその「逸話集」にも、「ランボオ伝」や「ボオドレエル伝」と同様に、彼自らが影響を受けた作家の生態は見事に浮き彫りにさ

れ、それは未完の物語とも言うべきものである。小林の「私は、バルザックが『人間喜劇』を書いた様に、あらゆる天才等の喜劇を書かねばならない」（「様々な意匠」）という言葉にも、バルザックに影響を受けつつ、一般社会を視野に入れて写実主義を遂行しようとする意志と情熱を見ることが出来る。全部合わせると25回の匿名連載全体からは、「バルザック伝」「バルザック逸話集」とは、ほんの一回的な間隙的位置でしかない。だが、所謂その言語的トポスには、そこに畳み込まれた思想的動機からすると極めて広みに繋がるような意味の振動がある。

「バルザック逸話集」の「逸話」ということに関しては、中期の「菊池寛論」に、「菊池氏の私小説の魅力は、誇張のない逸話と同じ性質のものだ。人間の魅力に富む正確な逸話の種をいつも供給してくれている様なものだ（中略）言わば自分で自分の逸話を語る大家の様なもので、告白は逸話にならない事をよく心得ている」という発言がある。江藤淳は小林の「菊池寛論」を散文的スタイルが転換した一つの分岐点と指摘する。だが、そうした純文学と大衆文学との統合という小林の表現的動機は、ごく初期の頃から存在していた。小林は「バルザック伝」を所謂バルザックの最後までを構想しつつ書き始めたかも知れない。しかし、初回の段階でそれに見切りをつけて、ボオドレエルの評伝に対象を切り替えた所に、彼の可能性と限界いわば宿命的性格があるように思われる。

(註)

- 1) 本稿は、「小林秀雄の『フランス語講座』」（専修人文論集 第87号 2010年10月）の続編である。テキストは第六次「小林秀雄全集」（新潮社）及び全集以外の作品は発表雑誌（文藝春秋）、単行本あるいは文庫本を使用した。以下各章に渡って、引用文の仮名使い、句読点、文字使いなどは適宜、旧字体を新字体に改めた。
- 2) 「ボオドレエル伝」は、『文藝春秋』に「ランボオ伝」と同じ形式で、1928年9月から1929年12月に、途中1月と5月に休みを入れて、ほぼ毎月連載された。1929年11月号が、（第14回）と誤記である。正しくは（第13回）であり、12月で終了するので、全部で14回の連載である。「ランボオ伝」の第5回目に掲載された「ボオドレエ

ルの最後」の内容は、「ボオドレエル伝」の14回目の後半と重複する。「ボオドレエル伝」の紹介に関しては、本稿とは別個に行いたい。

- 3) *La vie aventureuse de Jean arthur Rinbaud, jean-marie carré, plon-paris 1926* (『地獄の遍歴者—アルチュール・ランボオの生涯』ジャン・マリ・カレ、訳者—江口清、立風書房、1971年10月) 尚、引用は江口の翻訳を参照するが、本稿の文脈上、原文に従って適宜訳文を変えた所がある。
- 4) 『アルチュール・ランボオ』「第六章 ランボオの諸作品」橋本一明 小沢書店 1985年7月
- 5) 『ランボオ私註』II「悲しみの樂園」宇佐美斉 国文社 1979年2月
- 6) 「ランボオⅢ」では、この部分を小林は、「枯れた木さえない、草つ葉一つない、一とかけらの土もない、一滴の清水もない。アデンは、死火山の噴火口で、底には海の砂が一杯詰まっている。見るもの、触れるもの、ただ僅かばかりの植物を辛うじて生やして置く溶岩と砂ばかりだ。附近一帯は、全然不毛な沙漠である。噴火口の内壁の御蔭で、此処は、風も這入らぬ。何の事はない、穴の底で、僕等は石灰の窯の中にいる様に焼ける。こんな地獄へまで使はれに来るとは、よくよくの宿命の犠牲者に違いない」と原文により忠実に訳読された。
- 7) 『中原中也』「思想」大岡昇平 角川文庫 1979年5月
- 8) 『小林秀雄』江藤淳 角川文庫 1969年4月
- 9) (『小林秀雄の思い出』「藤の花のころ」郡司勝義 1993年11月)
- 10) (『バルザック 創造的芸術家II』「バルザックの生涯」エミール・ファージェ 木村莊太訳 新しき村出版部 1924年) には、他にサント・ブウブやアーサー・シモンズのバルザック論も収録されている。こうした様々な知見が予め小林の胸中であって、メ切に合わせて手本を見ずに、書かれたのかも知れない。